

1 はじめに《1991年度に思う》

1991年度、この1年の営みは私に生きる勇気と自信を与えてくれた1年間であった。1991年は、私にとって教職の道を歩み始めてちょうど10年という節目の年である。この節目の年に3年B組の生徒たちと出会えたこと、ただ感謝の言葉しかない。この1年間に繰り返された数々のイベントを3年B組の生徒たちは見事に頑張り通してきた。一つのイベント、一つの峠を越える度にたくましく心豊かに成長していく生徒の姿が、私にエネルギーをくれているようであった。中学生には私の想像を遙かに越えた限りない可能性があるということを頭ではわかってはいたつもりであったが、そのことを実感しそのことに確信を持った1年であった。

4月、生徒と「峠」の詩を学んだ。私は毎年4月の学級開きのときに詩「峠」を学び続けてきた。「大きな喪失にたえてのみ、あたらしい世界が開ける」と訴える「峠」の詩と新しい学年のスタート点に立った自分を重ねる。いつまでも過去を引きずるのではなく、「峠」の詩に今の自分を思い、新しい学年、新しい学級との出会いを大きな成長の場面にしたいと願い続けてきたからだ。1年間、人間としての生き方を考え続けた道徳の時間のスタートとして詩「峠」の学習があった。

生徒と共に「峠」の詩を心の支えとして生きる私のこの1年の最初の峠は、新学年早々に実施された家庭訪問であった。昨年度より続けてきた学年全体による同和問題の学習、同和問題が私にとって何であり、生徒にとって何であるのか。そのことをはっきりさせることなしにいくら同和問題学習を続けてきても、常に表面的なものでしかない。自分の立場を自覚し、自分自身の本当の生き方を求めていくことは、つらく悲しいことであるかもしれない。しかし、その苦しい部分をしっかりと見つめ、自分自身のおかれている状況を自覚することから、人間としての本当の生き方をつかむことができ、生きる喜びや幸せを実感していくことができると考えた。

私は部落差別の中を生きてきた苦しみや悲しみ、そして喜びを家庭訪問の場で生徒と親に語っていった。差別の中を生きてきた私の本当の思いを通して、生徒たちに部落問題学習の意味を明確に自覚してほしいと願った。このことは対象地区生徒にとっては、厳しい差別の現実を見つめることになった。

今年の家庭訪問で初めて自分が対象地区生徒であるということを知った生徒が二人いた。この世に部落問題が存在する限り、社会的立場の自覚は中学校入学までにさせてやりたいということをしみじみ思った。

一人はA子であった。まさか自分がそうだとは思っていなかったと、涙が溢れてくる。「去年、『私の目を見て!』の授業のとき、先生が部落の人間だといったときどう思った」という私の問いかけに、A子は涙を流しながらではあるが「そんな関係ないと思った」とはっきりと答えた。しかし、A子の涙は家庭訪問の間中止まらなかった。あの涙は本当につらかった。あれほどA子に悲しみの涙を流させる今までの同和問題学習とは何だったのか。そんなことを思いながらA子の家を出た。あの頃は親の顔を見るのもいやだったとA子は言う。

その日の教育記録(週録)に次のような文章がある。

《昨年度2年B組で同和問題学習に取り組む中、同和問題に対する憤りは育っていった。しかし、自分にとって同和問題が何であるかという学習、社会的立場の自覚をさせていなかったため、中

学3年の家庭訪問で初めて自分の立場を自覚した。部落差別は許せないと、すばらしい生き方を
つかんでいくんだと思っていたA子であったが、涙がとめどなく流れてきた。あの涙を怒りの涙、
人間としてのあり方を求めていく熱い涙に変えていく営み、それがこの1年の営みである。》

あれほど悲しみの涙を流したA子が、板野郡同和教育研究大会の公開授業において、仲間の励
ましの中で立ち上がっていく。まだA子の目には涙があった。しかしあの授業を通してA子は大
きく成長していったと思う。翌日の生活ノートは私に同和問題学習に取り組んでいく自信のよ
うなものをくれた。

《私は今日の発言で部落のことが恥ずかしくなくなりました。もう何のこだわりもありません。
発表している時は自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、SさんやJさんが
発表したのに、私だけ黙つとつてもいけないなあと思っていたんです。そしたら、自然と手が挙
がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、K
さん、Oさんたちが言ってくれて、ほつとして発表してよかったなあと思いました。泣くのは今
日で終わりにします。M君とか、Tさんとかも他人の涙は見たくないと言っていたし。今日の授
業で私は多くの人に支えられているなあと実感しました。みんな信じ合える仲間です。板野に生
まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。

「歎くより怒ることだ」を胸にきざんで。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで
「学習会の通知やもらいたあない」と歎いていた自分がばからしくなりました。これからも学習
会に参加していきたいし、どんどん学習していきたいです。いつか絶対絶対差別がなくなってい
ると思います。何か、楽しみです。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。
うれしかった。よかった。ビデオ貸してください。》

A子は板野郡同和教育研究大会の公開授業を通して確かな一歩を歩み出した。

もう一人は、B夫である。B夫も家庭訪問の日までは自分が対象地区生徒であるとは夢にも思っ
ていなかった。私の言葉で自分が対象地区の生徒であることを知ったB夫は、涙こそ流さなかつ
たが、目はうつろになりその瞳は焦点を失っていた。私の「つらいか。」という問いに、一生懸
命首を横に振って見せるが、今まで滑らかにいろんな思いを話していた口は固く閉ざされてしまっ
た。今まで全体学習で発言してきた思いは何だったのか。部落の仲間と共に頑張っていくと多く
の仲間と思いを交わし合ったのに、自分がその部落の人間であると知ったとたんに言葉を失い、
何かに絶望したように動揺していく。今まで生徒たちに生きる力をつけていく同和問題学習をやっ
ていくんだと言い続け、実践してきたことは何だったのか。B夫の動揺し悲しみの色を隠せない
うつろな目は、「先生、助けてください。」と訴えているようだった。そのB夫も板野郡同和教
育研究大会の公開授業で涙を流しながらも必死に自分の本当の思いを語っていくクラスの仲間の
支えや励ましの中で、B夫自身は吹き出るような涙を流しながら、本当の思いを学級全体にぶつ
けた。B夫が語った「部落の人間ですって気軽に言える社会を目指して頑張っていきたい。」と
いう言葉が私の心につき刺さっている。

本年度の家庭訪問は、私自身が私自身の生き方を問いただしていくものにもなっていた。あ
るお母さんは、私の生きざまと自分の歩んできた道とが重なったのだろう。思いがこみ上げてき
て涙を流される。「お母さん、誰もが涙や流さんでいい社会にするために同和教育、徹底的に頑
張るけん。」という私の話にしっかりとうなずいてくれた。その横にいたC子は次の日、生活ノ

ートに次のように記している。

《家庭訪問の日、母は泣いた。この涙は部落のものにしかわからない。母は先生の話の中で、心の中にこみ上げてくるものがあつたのだろう。自分はあのとき、「耐えろ。何で泣くんや、くやしいんか」って心の中で叫んでいた。自分までも涙をこらえるのに必死になっていた。しんみり湿った話の中、私は母につらい思いをさせる差別をたまらなく憎んだ。泣いてたまるか、差別に負けない人間になるぞ。弱い心よさようなら、強い心よこんにちは。》

C子は繰り返される同和問題学習の中で、より確かな生き方をつかんでいった。C子は将来教職の道を目指して頑張っている。

D子の祖父は、私の思いに応えてしみじみと生きざまを私に語ってくれた。

《先生、私は9人兄弟の3人目に生まれた。家は貧しかった。小学校2年からは一切学校に行っていない。字を知らない。全く書けない読めない状態で、誰も教えてくれる人はいなかった。そんな中にあつても一人で学び、字が読めるようになってきた。そして、会社を退職してからは、今まで字が書けなくて字を書かなかつた分、今一生懸命書き物をしている。そんなに長い時間同じ姿勢で書き物なんかするから、肩もこつてくるし腰も痛くなる。そんなことしなくてもいいのとおばあさんは言ってくれるが、このことは私に課せられた私が生きていく試練だと思って書き続けている。》

D子の家庭訪問は、学ぶこと生きることの意味を考えさせられた家庭訪問となった。人は生きざまをぶつけていくことにより心を開いてくれる。そんなことをしみじみと実感し、何か勇気のようなものがこみ上げて帰路についたことを懐かしく思い出す。

私はそんな一つ一つの家庭訪問を通して、私自身も大きな峠を越えていくことができたと思う。また、この家庭訪問によってこの1年、私の歩むべき道を私なりにつかむことができたと思う。

同和問題の学習とは教師と生徒、生徒と生徒、その互いの生きざまと生きざまがぶつかり合う、生き方と生き方を語り合う中から、差別解消に向けて生きていこうとする本当の生き方が見えてくる営みだと思う。教師の同和問題に関わる本当の生き方、そのことが授業の土台に流れない限り生徒の中から同和問題に関わる本当の生き方も語られることはないと思う。本当の思い、本当の生き方をぶつけ合うことなしに、いくら同和問題学習を続けても、常に表面的なものでしかない。自分の立場を自覚し、自分自身の本当の生き方を求めていくことは、つらく悲しいことであるかもしれない。しかし、現実には部落差別がある限り、差別の現実にはふたをしたままで、悲しみや苦しみを見つめることなしに、どうして本当の幸せが見えてくるだろうかと思う。

私は差別の中を生きてきた私の思いを通して、生徒たちに部落を自覚させ、部落をとらえさせていった。このことは対象地区の生徒にとっては、厳しい現実を見つめることとなった。部落差別の中で喘ぎながら必死に頑張ろうとする生徒の姿、その誠実な生徒の苦しむ姿を見つめる度に差別に対する憤りは激しく燃え上がっていく。どんなことがあつてもこの歩みを止めてはならない、頑張り続けなければと思った。今しみじみと思うこと、それは家庭訪問での語り合いがあつたから、対象地区の生徒の立ち上がっていく授業が生まれてきたんだということだ。

3年B組は常に全体学習のリーダー的役割を果たしてきた。4月30日に学校全体で初めて全体学習に取り組んだときも、他校の先生方が参観した2学期10月11日の全体学習においても、他の学年、他の学校の先生方や生徒たちへの熱き思いが語られていった。同和問題学習をすることの

意味を3年B組の生徒たちは明確につかんでいた。

繰り返し繰り返し取り組んでいった同和問題学習、そのすべてを授業記録としておこすことはできなかったが、その一つ一つの授業に生徒たちの本当の思いをぶつけ、生徒たちの絆はより確かなものとなっていった。そしてその中で私の全く意図しない発言や、私の期待を遙かに越える発言が、数限りなく生まれてきた。第35回板野郡同和教育研究大会の公開授業においても、第25回全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業においても、第21回徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業においてもそうであった。

第25回全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業では、井上ひさしの「ナイン」という資料を学習したが、その作品についても、同和問題学習で培われた思いをもって発言を重ねていった。その火付けとなった発言には授業者である私も胸がいっぱいになっていた。その発言は次のようなものである。

《いろいろ考えているときに、一人の友だちに言われたんだけど、「もし私が部落の人間として、私がこれからのこと今のこといろいろと悩んでいてその苦しみをわかってほしくて、『私は部落の人間です』って、この3年B組のみんなに打ち明けたら、そのとき3年B組のみんなが温かい眼差しで『何言よん、そんなこと関係ないよ、これからいつしよに学んでいこう』と言ってくれたとき、それが陰をつくってくれたことになるんと違うん。私はそう思うんよ。」と言ってくれたんです。そのとき私はハッとしたんです。英夫と正太郎の関係は私たちが同和問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあって否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで一生懸命に同和問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しんでいる友の叫びを聞いてからです。今思うといろんなことがあったけど頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そしてその子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなあとと思います。》

その発言に関わってある生徒は次のような感想を授業後に記している。

《Nさんが部落問題のことを出したとき、「ここでNさんを支えな」と思って手を挙げました。頭の中が真っ白になり周りの先生方の視線がすごく痛く感じました。だけどここで訴えなければ板野のみんなを裏切ることになる。みんなの分も私が訴えなければと思いました。すると自然に言葉が出てきて、何度も何度も手を挙げるエネルギーが沸き起こってきました。》

またある生徒は次のように思いをつなげて同和問題学習に寄せる思いを語っている。

《やっぱりこのナインの資料の中には、同和問題学習で学んできたことを土台として考えた方が何かわかりやすいところがあると思います。国語の学習という意味で考えたら答えを見つけるために決まった答えを探すために、みんな同じような考え方になっていくと思うんです。でも同和問題の学習では、お決まりの答えを求めるのではなくて自分の本当に感じたことや自分の中でみ上げてきたものを意見として語り合うことによって、どれだけ周りが反応してくれるかということが大切だと思うんです。本当の思いと思いをぶつけ合うところに同和問題学習の本当の意味や喜びや楽しさがあると思うんです。また、今まで積み上げてきた同和問題学習によってこのナ

インの関係は3年B組の中にもいっぱいできてきたと思うんです。支え合うということは本当に大切なことだと僕もしみじみ思っています。自分が発表したときに周りが支えてくれて、もっと頑張らないかん、こんな仲間のためにももっと頑張らないかんと思ってきたんです。実際僕は2年生のとき自分が部落に生まれたということをみんなに訴えたとき、みんながどんな反応をするかがとても不安だったんです。そのときにそんなこと気にするないつしよに頑張りたいという意見があつて、ものすごく嬉しかったんです。このナインの団結とか支え合うということを考えていくうちに、やっぱりみんなのことが真つ先に出てきて、それでこんな大きな授業とかをたくさん経験してきたから、ある程度は自分の思うままの意見が言えるようになってきたと思うんです。それでさつきI君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合つて生きていくことができれば素晴らしいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなくなったら差別されるかもしれません。だけど、今はこの周りに仲間がいるからどんなことがあつても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていきたいと思います。》

この第25回全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業、私は許されることならば同和問題に関する資料に取り組み、全国の先生方に同和問題学習の喜びや大切さを訴えたいという気持ちを持っていた。その私の思いを生徒たちはしっかりととらえ、私の思いを遙かに越えて、今までの同和問題学習で積み上げてきた思いをこの授業にぶつけてくれた。

また、第21回徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業において同和問題学習のあり方に迫る発言が次々と生まれた。一人の生徒が語る。

《涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当の喜びをつかんでいくことができるし、より人間として素晴らしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習をとらえて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もっともっと自分自身成長していただろうし、もっと早く変われたと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしが授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあつたんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもつ

ともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ同和問題の授業をやっていても、やったというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしかとらえられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学2年からやってきた本音の同和問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていかなければならないし、大きくなっても絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。》

そして、この生徒は授業後の感想をこれからの進路に思いをはせて次のように記している。
《以前から、将来の夢の中に学校の先生になりたいというのがあった。今思うと今までは普通の先生にあこがれていたんだと思う。でも今は違う。先生になりたいという夢は同じようにあるが、同和問題に必死に取り組んでいく先生になりたい。この思いは3年生の先生方を見ていて思うようになった。僕は同和問題に必死に取り組む先生方や周りのみんなの姿を見て嬉しくてたまらない。もし同和問題の学習がなかったら、自分を語ることも、自分をさらけ出すことも、自分が部落に生まれたということを誇りに思うこともなかったと思う。僕はこの学習の中で自分の意見なども思いきり表現できるし、語れるようになった。僕が3年生の先生方に同和問題に関わる生き方をつかませてもらったように、いつか学校の先生となって人間として同和問題に関わってどのように生きていくかを生徒たちに語っていくことができるようになったらなあと思う。その日を目指してこれからの一日一日を誠実に精一杯に生きていきたい。》

この徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業の最後は次のように締め括られている。
《もう時間がきてしまっていて言いたいのに言えなかった人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからもずっと頑張ってほしいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かっていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に頑張っていきたいと思います。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張った姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずにずっと差別解消の日まで頑張ってほしいと思います。》

この思いは3年B組すべての生徒の思いである。4月のスタート、対象地区の生徒は9名であった。本当の思いが語り合うことができる同和問題学習が成立したとき、対象地区の生徒は11名になっていた。胸張って堂々と下を向かずに私は逃げない差別をなくしていくために生きていく。そんな思いを仲間を信じ学級全体にぶつけたK子。部落に生まれた自分に不安を抱きながら揺れてきた思いと、今までの同和問題学習の中でつかんできた思いを「涙」という詩に表わしたR子。

『涙』

部落という言葉聞いて
心が重たくなるのはなぜだろう
悲しくなるのはなぜだろう

この差別のために何人の人が苦しみ
何人の人が涙を流しただろうか
そして何人の人が自らの生命を絶っただろうか

私は部落をつくった人
また部落を差別するすべての人を
決して許さない

私たちが流した涙は
いつか川をつくるだろう
そして部落差別と大きな悲しみを
水といつしよに流してくれるだろう
どこかへ消えてしまうだろう

私は解放の主体者として闘い続ける
部落差別解消の日まで

中学生の感性、中学生の本質、そのすばらしさを信頼し、一人一人の熱きものに感動しながら一日一日の営みがあつた。同和問題学習に取り組む度、授業の最後に出てきた私の言葉は「ありがとう」だった。一人一人の生徒たちを励まし続けるために頑張っていくんだという思いでいた私であつたが、いつの間にか私は生徒たちの頑張りや輝きに励まされていた。この記録をまとめたのもそうだった。絶対差別はなくなる、絶対この子らの信頼に応え頑張り続ける生き方をどんな困難な問題にぶつかろうが続けていく。そんな思いがいつも沸き起こってくる。その思いを確かなものにしてくれたのも3年B組の生徒たちであつた。この3年B組の生徒たちとの出会いに感謝しながら、1991年度授業実践の記録として本冊子「よろこび」をまとめていきたい。

私の思いのたけを書き綴った指導案の主題設定の理由。私は自分のすべてをぶつけることなしに生徒たちの本当の思いが返ってくる授業はできないと思った。私は私の本当の思いを主題設定の理由にぶつけていった。特に資料「自分以下を求める心」の学習指導案、資料「同和教育への希い」の学習指導案、資料「水平社宣言」の学習指導案に記した主題設定の理由には、私の思いを精一杯ぶつけていった。その主題設定の理由に込めた私の願いを多くの先生方にわかっていただきたい。そんな気持ちでいっぱいだ。

授業記録の一つ一つにも同じ思いがある。1991年度に取り組んだ八つの授業記録、初めて自分のすべてをさらけ出す授業となつた昨年度（1990年度）の「私の目を見て！」の授業記録、その一つ一つの奥に流れる生徒たちの思い、生徒たちの叫び、生徒たちの姿を多くの先生方にわかっていただきたい。そして、自分のすべてをぶつけて共に同和問題学習に頑張ろうとする先生方が、一人でも増えてくれればと思う。